

『後撰集新抄』翻刻（五）

日向一雅

A Transcription of *Gosenshū Shinshō* (V)

Gosenshū Shinshō, published in 1814, is a representative commentary on the *Gosen Waka Shū*. It was once reprinted between 1910 and 1912 by the Kasho Kankōkai but has since become a rare book. According to the General Bibliographical Index there are only ten complete sets in existence. Although unlisted in the Index, the library at Seishin Joshi Daigaku is in possession of all 15 volumes of the set. In vols. 64, 66, 67, 68 and 70 of *Seishin Studies* I presented a transcript of the "Bekki" volume and volumes I, II, III, IV and V. For this issue I have transcribed volume VI.

後撰集新抄秋中 六（外題）

後撰和歌集卷第六新抄

秋歌中

延喜御時に、秋、歌めしありければ奉ける

○秋」とよみ切て、歌めしありければ、此歌を奉けると云意なり。秋の歌といふことにはあらず。

秋とは、歌をめされたる時をいふのみなり。上巻ノ下巻廿三葉に、やよひばかり云々と、ある所にいへるをも引合せてわきまふべし。やゝ似たることなればなり。

紀貫之

三三 秋ぎりの立ぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見えわたりける

○くらぶといふ山なれば、暗く思はるゝはもとよりなれど、秋霧の立たる時は、おぼつかなくばかり見え、たしかに見えわかずといふこ意なり。おぼつかなしとは、たしかに見えわかぬをいふなり。末ノ句、見えわたるとは、初め見たる時より、終まで同じさまに見ゆる事なり。わたるといふ言は、皆同じ事にて、恋の歌に、恋わたるといふも、はじめ恋しと思ひそめたる時より、後々同じやうに、始終恋しく思ふことなり。此わたるといふ言を、遠鏡に、云々シテ月日ヲタテルコトカナ、などやうに訳されたるをも、よく思ふべし。

暗部山は、山城ノ国なり。順家集に「くらぶ山ふもとの野への女郎花といふ歌の判の詞に、さが野を打過

て、くらぶ山までもとめありきけんもあぢきなしといへり。又天武紀に、倉屋クラヤあり。それは、和名抄に、近江ノ国甲賀ノ郡藏部ホクあり。これにて、同名異所なりと、契沖阿闍梨いはれたり。

三三

花見にといでにしものを秋の野の霧にまよひてけふはくらしつとと

○花見てこそ日をくらさめと思ひしを、花までもあらずして、きりをわくるほどに日はくらしたりといひて、即チ秋野に遊びたる情をいへるなり。菅家万葉に「音にきく花見にくれば秋の野の道迷ふまで霧ぞ立ぬる、とあるとは似て異なり。

寛平御時、后宮の歌合に

よみ人しらず

三三

浦近く立秋霧朝のもしほやく烟とのみぞ見えわたたりあやまたれける 興風集ける

○浦近くは、浦に近くにて、浦辺にといはんが如し。浦辺はもしほやく烟のたつものゆゑに、其心ならひに、霧のたつのもひたすら烟のたつやうに、始終見ゆる事よとなり。見えわたるとは、ふとうち見たるばかりにてはなく、よく見てもさやうに見ゆるをいふなり。わたると(二オ)いふ詞、此巻の初歌にいへるが如し。六帖「秋霧のたつを烟と見しほどに山の木の葉も色づきにけり。中務集「浦近く立つる秋の霞ともやく塩がまのけぶりをぞ見る。

おなじ御時の、女郎花合に

藤原興風

三函
をるからに我名はたちぬをみなべし。いざおなじくは花々に見ん

○抄云、僻按抄云、一説には、花ごとに見んと有。同心なり云々。折からに已に名はたちぬ。同じくは花々に、なべて手ふれていざ見んとなるべしとあり。此説の如くならんか。又考ふるに、花々にと云詞の例は、今思ひ得ざれども、万葉八に「霞たち春日の里の梅の花はなにとはんとわが思はなくに」とありて、花にとふとは、はな／＼しくあだに訪ふ意なり。卷廿に「まひしつゝ君がおほせるなでしこがはなのみ」云とはん君ならなくに、といふも同じと、鈴屋ノ大人いはれ、又同卷八に、「風まじり雪はふるともみにならぬわぎへの梅を花にちらすな、とあるを、花には、あだにといふ意なりと、千陰翁もいはれたり。又上^段にも、「我宿の垣ねに植しなでしこは花にさかなんよそへつゝ見ん、とあるも、花にさくとは、はな／＼しく咲出るをいへりと聞ゆる事、上にもいへるが如し。かゝれば、今の花々とあるも、大かた似たる詞なれば、あだ／＼しくはなやかにと云意なるべし。然れば一首の意は、女といふ名の花を手折つれば、折るとそのまゝに、もはや我あだなる名は立たり。とてもかく名のたつうへは、人のいひ思はんことなどを憚らず、うち出して、はな／＼しく愛せんといふならんか。但し此歌の末句、六帖には、「花ながら見んとあり。瓶麻呂云、此六帖^三なるにしたがはゞ、一首の意は、女郎花を折るゆゑに名がたつなり。いざ名を立てんよりは、名のとぬやうに、同じ見るならば、花は花にて見んとなるべし。花々にとは、やはり立たるまゝにて、手もふれずて見んと云にて、六帖に「花ながらとある詞、即同意なるべしといへり。此説や然るべからん。猶よく考ふべきなり。

よみ人しらす

三三

秋の野の露におかるゝをみなべしはらふ人なみぬれつゝやふるわびつゝそ 興風集

○露に被^{オカ}結^カたる女郎花の、^マ重^カげに見ゆるを見て、さては払^ハふ人のなさに、ぬれく^テのみ日数をふるにやといへるのみなるべし。露におかるゝは、^風露^ノの心^ニにまかせおくやうの意にいへるなるべし。
下^下秋に「いたづらに露におかるゝ花かとして心もしらぬ人(三三)やをりけん。

三五

女郎花はなの心のあだなれば秋にのみこそあひわたりけれ

○花の心のあだなるゆゑに、あきにあはぬといふ事はなく、いつとても、毎年秋に遇^アひつむる事よとなり。あだくしき女の、早く人に飽^アかるゝやうにいへるなり。花の心のあだなりとは、古今^上秋「女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらん、同^{俳諧}歌「秋の野になまめきたてる女郎花あながしがまし花も一時、などの類にいへるなり。

母の服にて、さとに侍けるに、せんていの御ふみたまへりける、御かへりごと

※つかね緒云、はくのぶくにて、さとに侍けるに、内より御文給へりける、御返事に、せんていと書るはいかゞなり。

近衛更衣(西才)
江一本

三六

五月雨にぬれにし袖にいとくしく露おきそふる秋のわびしき

○近江ノ更衣、五月に母に別給へるなるべし。母服一年、暇五十日。令に有。其程の事にやと、抄にいへる、然るべし。母ノに別侍し五月の頃より、ひるまもなき袖に、秋の来ていよく^{オキ}以て露おきそひ、濡まざる事の、わびしく侍る事よとなり。

御返し

延喜御製

三六

大かたも秋はわびしき時なれど露けかるらん袖をしぞ思ふ

○一首の御意明らかなり。猶上下の御句の間に、わきてなどいふ詞を加へて見れば、いよ／＼よく心得らるゝなり。

亭子院の御前の花の、いとおもしろく朝露のおけるを、めして見せさせ給ひて(四)

法皇御製

三七

白露のかはるも何かをしからんありての後もや世は伊勢菜うさきものを

御かへし

三六

うゑたてゝ君がしめゆふ花なれば玉と見えても見よと疑や 六帖や露もおくらむ

○此御贈答のこと、考ありて、別記にくはしくいへり。よりてこゝにははぶけり。

大輔が後涼殿に侍けるに、藤つぼより、女郎花をよりてつかはしける

○後涼殿は、コウロウデンとよむ。又ゴリヤウデンとも云フと見えて、東山左府名目鈔にも、

二かたに訓訓をつけられたり。然れども、まづはコウロウデンとよぶ方にやと思はるゝは、源氏ノ

(五)物語などにも、多く仮字にもしか書て、河海抄河海抄 桐篋にも、俊成卿云、こうらうでんと可レ読。

かながきの物を、正字の如く読は、こはきなりとも見えたり。藤壺フヅツボは飛香舎トキカゼノヤの別号にて、禁中五舎

の一なり。

右大臣

二二 をりて見る袖さへぬるゝ女郎花露けきもの身とも一本と今やしるらむ

返し

大輔

二三 万代にかゝらん露を女郎花何思ふとへ一本かまだきぬるらん

又

右大臣

二四 おきあかす露のよなく経にければまだきぬるとも思はざりけり

かへし

大輔(全)

二五 今はやうちとけぬべき白露一本の心おくまで世をやへにける

○此贈答四首はいさゝかやうありげに聞ゆれば、種々に思ひめぐらせども、いまだ考へ得ず。されど試に思ひよりたる事どもはあれば、委く別記に出せり。

相しりて侍ける女の、あだ名たちて侍ければ、久しくとぶらはざりけり。八月ばかりに、女の許より、などかいとつれなきと、いひおこせて侍ければ

※つかね緒云、伊勢をあひしりて侍けるに、あだ名立て侍ければ、久しくとぶらはざりけるに、八月ばかりに、などかいとつれなきと、いひおこせて侍ければ。

二五

白露のうへはつれなくおき居つゝ秋の下葉の色をこそ見れ

よみ人しらす

〇かく上方ツツバはつれなく、しらず顔して、なほざりにのみして居て、実はそなたのうつろひ行色を見る事なるは、となり。三ノ句、おきぬつゝツツバは、なほざりにてある意を、露の縁にていへるなり。

かへし

伊勢

二六

心なき身は草葉本にもあらなくに秋くる風にうたがはるれぬるらむ六帖

〇初句の意、抄には、身は心なき草葉にもあらなくに見るべし。草木は非情なればなりとあり。此説の如くならんには、心なきといふ事、草葉にもへかゝりて、心なき草葉の類なる、此身にてもあらぬにと云意と見る事なれども、さては、心なきと云事、用なき詞となり、心なき身は草葉にもといふ詞のつゞきも、さる意にいへりとは思はれず。此歌にては、心なき身はといふ事、末句の疑はるらんとあるにかけ合て、心なき身はといふに、疑はるべきゆゑはなきにと云意、こもりて聞ゆるなり。然れば初二ノ句は甚用ある詞なり。瓶麻呂云、初句六〇心なきは、心裏なきといふ意にて、化ツツバ心なきをいふなるべし。一首の意は、心裏ツツバもなく、化ツツバ心なき我身は、もとより疑はるべきはづはなく、秋の木葉のうつろふが如き事などのなきは、論もなき事なるを、いかで秋くる風に疑はるらんと云意なるべし。されど、心なきと云詞を、かくざまに遣へる例は、今ふとは思ひ出ずといへり。げに例はいまだ得思ひ得ざれども、決して此説の如くなるべく思はる。此歌、下四雑にも又出たり。家集には、詞書はなくて、「ふかく思ひそめつといひし言の葉はいつか秋風ふきて散ぬる、返し「心なき身は草葉にもあらなくに秋ふく風に疑はるらんとあり。

男のもとにつかはしける

よみ人しらす(七五)

三六

人はいさことぞともなきながめにぞ我は露けき秋もしらるゝ

ぞ一本

○君はいかどある知らざれども、我はさしもなき事にも物思ひのせられて、秋のあはれが、身にしみくゝとわびしく悲しく侍り。これは君の御心の程も、心ならぬさまなれば、其うき恋の思ひゆゑにて侍りといふにて、我は、心苦ゆゑに露けき秋も思ひしられ侍りといふ意なるべし。三ノ句一本に、ながめにも、結句秋ぞしらるゝとあるかた、二ノ句の、ことぞともなきといふ詞の勢ひには、よくかなへり。されど本書のまゝにても、心得がたしといふにはあらずと、師翁いはれたり。いさは、万葉に多く不知と書て、即此字の意なり。卷十一に「いぬかみのとこの山なる不知也川不知二五きこせわが名のらすな、とある略解にも、不知をいさといふは、人のもの間に、知らざる事をば(七五)、いさしらずと答ふるを略て、いさとのみいひて、不知事となれり。いさは、否と同語なりと見えたり。さもじを濁(ニゴリ)して、(卑)イ(七)なふ意にいへるとは異なり、ことぞともなきは、その事としもなきにて、俗言に、何ッノコトモナイといはんが如し。古今三「秋の夜も名のみなりけりあふといへばことぞともなく明ぬるものを、など猶多し。

人のもとに、をばなのいとたかきをつかはしたりければ、かへりごとに、しのぶ草をくはへて

※つかね緒云、伊勢が許より、を花のいと高きをおこせたりける返事に、しのぶ草をくはへて。

中宮宣言

三六

花すゝきはほに出ることもなき宿は昔しのぶの草をこそ見れ

○今は時めく事もなき我宿は、たゞ昔をしのぶのみなれば、此垣^{シツク}衣草をのみ見侍るぞとなるべし。かなたよりおくりたる薄は、長たかくハき穂に出たる物なれば、君は此薄の如く時めき給ふめり。我は穂に出る事もなければ、といふ意をふくめたるものと見えたり。又思ふに、わが身をかしき恋のかたらひ人もなき事なれば、穂にあらはれて、世間の人にとやかくいはるゝ事もなし。昔より相かはらず忍ぶ草をつみて過すばかりぞ、などいふ心にもあらんかとも思へど、いかゞあらん。

かへし

伊勢

三六

宿もせにうゑなべつゝぞ我は見るまねくをばなに人やとまると

○こなたよりやりたる薄を、秀^{ヒラツ}る事のやうにとりなしていひおこせたるゆゑに、それにこたへて、いなとよ、我はさる心にては侍らず、我も人にふるされたる身にて、今は誰とひ来る人もなきゆゑに、此薄(ハ)の穂に出てまねかば、もしとまる人の有もやせんとて、せめてものことに、宿も狭^まきまで、此薄をば植ては又植、うゑてはまた植して見侍るぞとなり。二ノ句つゝの詞は、植たる上へはまた植るよしなり。此つゝにて、あはれ深し。

題しらず

よみ人不知

三七

秋の夜をいたづらにのみおきあかす露は我身のうへにぞ有ける

○抄云、何なすわざもなく、長夜を起明す我身を、露にたとへてよめり。又恋の歌にや。逢事もなく明す

心なりといへり。げに恋のうへにて一人おき明すを、いたづらにあかすといへば、抄の後の説の如く、恋の歌ならんか。又思ふに、次の歌どもは、世中のはかなき事を思へる意とも聞ゆれば、此歌もさる意にて、いたづらに云は、物思ひに云九さいも寝ず、そのかひもなき事を思ひつゞけてのみ起明す意ならんか。然れば、小大君集に、「草の葉にあらぬよなれどもすれば露は我身の上かとぞ見る、後拾遺上秋「草の上におきゐてあかす秋の夜の露ことならぬ我身と思へば、又、下卷此に「秋はぎの色づく秋をいたづらにあまたかぞへて老ぞしにける、などの類にもあるべしとおもはるゝなり。

三二

大かたにおく白露も今よりは心してこそ見るべかりけれ

○抄云、此歌義多し。一説は、秋の露はよの常に異なればなり。一説は、露を身の上と観じての上は、心して見んとなり。猶可尋とあり。今思ふに、こは必後の説の方なるべし。上の歌と合せて見れば、よく聞ゆれば、もしは同じ人の、おなじ時によめるにもあるべしと、我友古道云いへり。一首の意は、たゞ何となくおく露をも、はかなき世を思ひめぐらせば、今よりは心なしに見過すべき事にはあらず。よく心をつけて見るべき事なるよとなるべし。此集は、古今の撰にてはあれども、古今集の如く、歌の次序など正しくはあらぬ事総論に委しいへるが如し、されど又、むげにみだりに物したるにはあらず、大かたには心してついでられたる物とは見ゆれば、題のしらぬなどは、上下の歌を以て考へ合せなどもすべき事なり。此所の歌も、前後ともに物思ひあるをりとの見ゆれば、此歌も同じさまなるべく思はる。

右大臣

三三

露ならぬ我身と思へど秋は異の夜をかくこそあかせおきあながらに

○我身は露にはあらずとはおもへども、やはり露の如くに、此秋の長き夜を、かやうに起居てのみ明す事

よ。物思ひに目もあはねば、と云意なるべし。但し、此作者右大臣は、九条ノ右大臣師輔ノ公にて、此公の千々集には、秋の比、兵庫に「露ならぬ」云。返し「秋をあさみまだ深からぬよをさへやさのみは人のおきあかすらんとあり。かくては恋の意と聞ゆるなり。

秋のころほひ、ある所に、女どもの、あまたすのうち侍けるに、男の、歌のもとをいひ入て侍ければ、すゑはうちより

○すのうちには、簾の中になり。歌のもとをいひ入とは、「白露の」と云、上ノ句を云入たるなり。さて簾中なる女の「花の色々」と、下ノ句をばつけたる連歌なり。伊勢物語六十に、昔、男ありけり。其男、伊勢ノ国にかりの使にいきけるに云。夜やうやうあけんとするほどに、女がたよりい

だすさかづきのさらに、歌をかきて出したり。とりて見れば「かち人のわたれ千々どぬれぬえにしなければ、と書てすゑはなし。其さかづきのさらに、つい松のすみして、歌の末をかきつく。「またあふ坂の関はこえなんと云とあるなどの類なり。

拾遺集雜賀などにも、此類の連歌多く見えたり。

ぎてよめる事は、書紀の景行の御卷に、歴テ常陸ヲ、至テ甲斐国ニ、居ニ于酒折宮ニ。時ニ舉燭而進食ス。是夜以テ歌ヲ之問テ侍者曰、珥比摩利、菟玖波塙須擬氏、異玖用加祢菟流。諸侍者、不能答言。時ニ有乘燭者。續テ三王歌之末ニ而歌曰、伽餓奈倍氏、用珥波虚々能用、比珥波苦塙伽塙。即美ニ乘燭人之聡ヲ而教賞ス。とあり。これ物に見えたるははじめなり。

よみ人しらす

白露のおくにあまたのこゑすればなり一本花のいろくありとしらなん千一

○白露のは、おくにといはん料なり。おくには即簾の中の事なり。下窓にも「いさやまた人の心もしら露のおくにもとにも袖のみぞひつ」とあるも、簾外にて男のよみたる事、同じさまなり。声すればは、女どもの声の事なり。されど歌の表にては、虫の声にとりなしていへるなり。花の色々は、即はなやかなる女どもの、多く有と知給へといふを、虫の声にかけ合せて、みづからかくいへるなり。
さて此歌の上ノ向大かたならんには、声するはといふべきて、ちのせらるゝ所を、すればといへるにて、こよなおもひとし、ればある。にて、其所ノソコへ行かまほしくなつかしく思ふ意もこもりて聞ゆればなり。

八月なかの十日ばかりに、雨のそほふりける日、女郎花ほりに、藤原もろたを野べにいだして、おそくかへりければ遣しける

○雨そほふるは、俗に、シヨボくトフルと云意にて、細雨こすずのふる十二さまをいふなり。万葉十六に、「いや彦のおのれ神さび青雲のたなびく日すらこさめそほふる。伊勢物語二段又古今恋三「おきもは春の物とてながめくらしつ」といふ歌の詞書に、時はやよひのついたち、雨そほふるにやりけるともあり。おそくかへりければは、帰る事の遅おそかりければと云意にて、いまだ帰らざる先の事なり。そをかくいふは雅文の常なり。

左大臣

二五

暮はてば月もまつべしをみなべし雨やめてとは思はざらん

○雨の晴るゝを待たんとして夜に入なば、又其まゝにて、月をも待て見るやうになるべし。よりに、雨をやませてとは思はずに、暮ぬ間に早くほりてかへれかしとなり。秋ノ野のおもしろく、心ひかるべき事十二を思ひやりたる趣意なり。拾遺秋、嵯峨野に前裁ほりにまかりて、藤原ノ長能「日ぐらしに見れど

もあかぬ女郎花野べにやこよひたび寝しなまし。

題しらず

よみ人しらず

三壺

秋の田のかりほの庵宿異のにはふまでさける秋萩見れどあかぬかも

○此歌、万葉十に出て、「秋田かるかりほのやどりにほふまで云々とあり。仮庵のあたりまで映あふほどに、色の美しく咲る秋萩といふ事なり。此類のにほひは、香をいふにはあらず。色艶イをいふなり。

三六

秋の夜をまどろまずのみあかす身は夢ぢとだにもたのまさりけり

○まどろむとは、目のとろむにて、睡氣チヤのきざすをいふなり。恋の心の切なるゆゑに、秋の長き夜を、ねぶけもなくのみ明す身は、夢に逢ふ十二事十三をだにもたのまず、長き夜を毎夜々々なげき明す事よとなり。恋の歌なる事は論なし。

萩の花をよりにて、人につかはすとて

三七

しぐれふり／＼なば人に見せもあへず散なばをしみをれる秋萩

○此萩の花は、秋の時雨のしぼ／＼ふりなば、君に見せもあへずして散ぬべし。さやうにいたづらに散果んはをしさに、かく手折て見せまゐらすぞとなり。しぐれは、後世には、秋の末より冬の初のものとするれど、和名抄にも、霰雨、小雨也。礼久と有て、さのみ定まれるには非ず。万葉十に、「さを鹿の心あひ思ふ秋萩のしぐれのふるにちらまくをしも。又「朝露に染はじめたる秋山にしぐれなふりそありわたるが

ね。又古今別體「をしむらん人の心をしらぬまに秋のしぐれと身み三みさぞふりにける、などもあり。

秋の歌とて

つらゆき

二五六

ゆきかへりをりてかざゝん朝な／＼鹿たちならず野への秋はぎ

○今を盛に咲たる萩の花を、毎朝々鹿が踏フミならせば、惜オシき物なるを、我は往オキにも還カヘリにも、折てかざゝん。鹿のふみしたくまゝにしておくは、いかにもあたら物なればとなり。鹿たちならずといふに、惜オシむ意あり。さてかざゝんといふにかけ合せたるなり。

二五九

我宿の庭の秋はぎ散にけりちりぬめりのち見ん人やくやしと思はん

むねゆきの朝臣

○一首の意明らかなり。早く来て見ればよきにと云意を、ふくめたるなり。元真集に「我宿の桜は風にちりはてぬあすこん人やくやしと十三おもはん。

三〇〇

白露のおかまくをしき秋はぎをよりてはさらに我やかざゝむ

よみ人しらす

○萩の花に露のおもげにおけば、折れぬべく見ゆるを、露にまかせて折らせんはをしければ、我こそ手折てかざゝめとなり。俗言にいはば、折ルタキナラバ、オレガ折ルと云に近し。此一首上に「行かへりをりてかざゝん云と、似たる意にて、おかまくをしきと我やかざざんとかけ合へるなり。又上ノ句、白露の

は、おかまくといはん料のみにて、おかまくは、たにおかかんはをしき花なればといふ意なりと、いふ説もありて、此説もあしからずおもはる。此歌はもと、万葉卷十に出て、下ノ句「をりのみをりておきやからさんとあればなり。をりのみ(十四才)折ては、ひたものに折てといふにて、折る事を強く、へるなり、をりのみ折てん、たゞにおきやは結らさんと云意なればなり。

年のつもりにけることを、かれこれ申けるついでに

○かれこれの人々と、年老たる事をいひあひて、わびたる序になり。

貫之

三〇

秋の葉の家菜 時菜
秋秋の色づく秋をいたづらにあまたかぞへて老ぞしにける

○此歌、一わたりの趣意は、かくれたる所もなきさまなれども、猶思ふに、三ノ句末句の「いたづらに老ぞしにけるといふ事力ありて、此秋も暮ぬ、又此秋もくれぬと、あまたかぞへて、何のかひもなく、かくいたづらに年の老たる事よ、といふ意と聞ゆれば、大かたに年老たるをなげく意とは聞えず。かく見る時は、初二ノ句「秋秋の云といふも、こ十四とに用ある詞にて、秋の県召などの事をふくめられたるにやあらんとも思はるゝなり。猶よく／＼考ふべし。

題しらず

天智天皇御製

三〇

秋の田のかりほのいほのとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

○此歌は、此天皇の御製にはあるざるべきよしは末にいふべし。まづ一首の意は、秋の田を守るとて、田の辺の仮庵カライヤに居るに、もとより仮初カライソに作たる庵なれば、屋根なども管ヤトがまばらなる故に、秋の長夜を夜も

すがら守居る我袖は、ひたものに露に濡たる事よ。さて／＼わびしきことかなといふなり。三ノ向あみは、ラサニの意なり。
 末句のつゝは、ひたすら濡てのみあるよしなり。此歌、六帖第二、かりほの題にも、此天皇の御歌として
 出せれど、もとは必万葉卷十なる歌にて、いさゝか十五才異なる伝へのありけん。其方を此集にもかく載
 せられたるなるべし。

此歌此天皇のにはあらざるべき事は、縣居ノ大人百人一首うひまなびに委く論はれたり。今要をつまみていふべし。

云、此詠にはいと論ある事ながら、まづ此まゝにていはゞ、万葉に詠三永田といふ如き、詠物なるべし
 云。さて詠物なれば、必しも守人ならでも、それになりてよむ事は、後世の題詠に同じ。さらばたとひ天

智天皇の御製なりとも、いと安くときつべし云。此天皇の御歌とありて、意は田を守る賤の上の事なれば、心得かれて、王道の衰を

委くわきまへられたれど、今の世にしては、さる僻説。なげかせ給へる意なり、或は諷刺の中の御歌なりなどいふ説のあるは、皆非なる事、
 家留。此歌の事、略解に、露の下、竹の字を脱せるなり。さなくては例にたがへり、新古これ心詞全く今の歌なれ十五ウば、此万葉
今集にも此歌をのせて、つゆぞおきにけるとありと見えたり。げにさる事なり。

の転記と見えたり。日本紀齊明天皇紀に、天皇筑前ノ国に行幸のをりに、朝倉ノ宮に崩じ給へる事ありて

いはく、冬十月癸亥朔、天皇喪婦ニ就于海一、於是皇太子天智泊於一所二哀三蕊天皇口號曰、一柁瀾我梅

能始衰之柁コホシヤカ網羅你波底々カクニ威底オホシ炬野始悲武謀キノヒ柁瀾我梅カクニ弘報梨。また万葉卷一、中ノ大兄オホニ、天智天皇の御分名、ト

三山ノ御歌の反歌に、「高山与耳梨山与相之時立見爾来之伊奈美国波良。これらぞ実に此天皇、皇太子の

時の御歌にして、上古のすがたなる。此御製より見れば、万葉に、秋田刈かりほをつくりといふは、後の

風なり。それより、秋の田のと有を見れば、又はるかに後にて、弘仁以後の調なり。凡日本紀万葉集は、

よろづのものゝもとゝも證據ともするに、それに対して考れば、秋の田の歌は、天智天皇の御製ならぬ事

あきらかなりなどいはれたり。か十六さりのほのいはは、重ね詞なり。うひまなびに、かさねことばに體用

ありて、かりほのいほどあるは、いたづらにことのかさなれるものぞと、論ひいはれたるは、思ひあやまられしなり。體のことばをかさぬる例は、真玉手の玉手、さひのくまひのくま川、月夜よし夜よしなどありと、百人一首峯のかけ橋に見えたり。然れば、仮庵カキヤの庵ヤと心得べし。廬イロをいほとよむ事は和名抄云、毛詩云、農人作廬以便三田事伊保と見えたり。

よみ人しらす

三〇三

我袖に露ぞおくなる天河雲のしがらみなみやこすらん

○常に川にしがらみをかけて、せきとよむる事のあるによりて、天上の川なれば、雲のしがらみといひよせたるなり。古今上雜「我上に露ぞ十六おくなる天川とわたる舟のかひのしづくか。しがらみは、川をせき、岸の崩たるをとしむるとて、柴竹など杭にからみ付るを云と、古今集打聴にあるが如し。今の俗にも、シガラといふなり。

三〇四

秋萩の枝もとをよになりゆくはしらつゆおもくおけばなりけり

○とをよは、枝のたわみて重きさまなり。萩の枝の、段々とたわみて、おもきさまなるは、露の置たる上へは又おきて、段々と重くオモクおくゆゑなるよな、といふなり。万葉十「秋萩の枝もとをよに露霜おき寒くも時はなりにけるかも又又「しだり柳のとをにをにもなともあり、又古今上秋「をりて見はおちぞしぬへき秋萩の枝もたわよにおける白露」とあるたわよは、枝のたよくととするかたちにて、とをよと云にいと近き詞なり。

三〇五

我宿の花がうへのしら露をけたずて玉にぬくものにもが(十七才)

○此歌は、万葉巻八に出たり。けたずては、ケサメシクシテ消而なり。ものにもがは、物にもがなにて、消さずして玉に貫く物にもあれかしと願ふなり。卷三万葉なり、「伊勢の海のおきつ白浪花に欲得つゝみていもが家つとにせん、など猶多くあり。末句の内文字濁るべし。万葉に毛我と書り。

延喜御時、うためしければ

貫之

三〇六

さを鹿の立ならずをのゝ秋萩におけるしら露我もけぬべし

○恋ノ歌なるべし。四ノ句までは序にて、白露の如くといふ意なり。恋の思ひの苦しさに、消ぬべく思はるとなるべし。家集には、恋の題に入て、「さを鹿のつまにしがらむ秋萩における白露我もけぬべしと有。又異本家集には、上ノ句「つま恋る鹿のしがらむとも、「さを鹿のなきてしがらむともありて、皆恋歌の中なり。(十七才)

三〇七

秋の野の草は糸とも見えなくにおくしら露を玉とぬくらん

○草のははは昔便には、おの、アキハ、辞のはなり。草葉にはあらず。此歌、例の上下の句の間に、いかでといふ事を加へて心得べし。上ノ句の終の、下ノ句の初に、いかでの歌よくみてあればなり。

文屋朝康

三〇 白露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

○草の葉に風が吹しきりて、露の散る秋の野を見れば、糸につながぬ玉の、はら／＼と散るやうに見ゆるよとなり。ふきしくは、吹頻るにて、さて、しくと云詞は、玉に縁あることなり。次^主の歌、また下冬に、「かきくらしあられふりしけ白玉をしける庭とも人の見るべく、とあるをも引合せて見るべし。(十八)

三〇 秋の野の秋のしら露に文集又一本おく白露をけさ見れば玉やしけるとおどろかれつぬる 異

たゞみね

○此歌にては、草葉の上におきわたしたる露をいへるは、論を待たず。三ノ句に、けさ見ればといひて、末句おどろかれつとあるにて、夜の間におきわたしたる露の、朝日の出る程に、きら／＼とかゞやきて、実に玉をしきたらんやうに見ゆるさま、見るやうなり。万葉卷十、「秋萩における白露朝な／＼玉とぞ見ゆるおけるしら露。

三〇 おくからにちくきの色になるものをしら露とのみ人のいふらん

○おくとそのまゝに、其草々々のいろになるものを、いかで人々の、白露とのみいふならんとなり。千草の色にとは、其草々々の色に見千八ゆるをいふなり。金葉秋「白露と人はいへども野べ見ればおくはなごに色ぞかはれる。扱三ノ句のを文字に例の力ありて、いかでといふ意をふくめり。

題しらず

よみ人不知

三二

白玉の秋の木の葉にやどれると見ゆるは露のはかるなりけり

○はかるは、あざむく欺なり。一首の意かくれたる所なし。白玉ののはいはゆる用語ののにて、やどれる「色」とちめて切たるを、とちうけたるなり。

三三

秋の野におく白露のきえざらば玉にぬきてもかけて見ましを

○露の玉を貫ても、消ざる物ならば、玉に貫てかけて見ましをといふなり。かけては、頭又は衣などにかくる事なり。古へ玉を以て身の飾としたる事は、かたぐいに見えたり。

三三

から衣袖くつるまでおく露は我身を秋の野とや見るらん(十九)

○くつるまでは、腐る腐ほどになり。抄に、我身を秋の野と露が見ておくかとなりとあるは、たゞ実の露と見たるなれど、今思ふに、こは秋のあはれに感じて、流す涙の、袖も朽ぬべきまで多きをいへるなるべし。次の歌も同じ。

三四

大空にわが袖ひとつあらんかなしく露のやわきておくらん異

○大空には、世中といはんが如し。そを、露は空よりおくものなれば、おほぞらにといへるなり。一首の意は、天地の間に、我袖のみ一つありといふにてもなきに、いかなれば我袖にのみ、とりわきてかく露のおく事ぞといふ意なるべし。二三ノ句は、我袖一つにてはあらなくといふならんとは思はるれど、あまりに辞ヒツをばぶきたるものなり。他にもかやうの例あらんや。猶考ふべきことなり。下ノ句は(十九)、異本に露のとある方よろしく聞ゆ。上ノ句よりいひ下したる詞のつづきも、いかでといふ事を加へて心得

る歌の格も、必やとあるべき所にはあらず。さて例の三ノ句のにもじに、いかでの意をふくみたる事、上にもいへるが如し。

三五

朝ごとにおく露袖にうけたためて世のうき時の涙にぞかる

○意明らかなり。古今下雜「こきちらす滝のしら玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる。

三六

秋の野の草もわけぬを我そでの物思ふなべに露けかるらん

秋の歌とてよめる

つらゆき

○二ノ句のをもじに力ありて、いかでといふ意をふくみたる事、上所々にいへるに同じ。一首の意はあきらけし。拾遺三恋「秋の野の草葉もわ二十まけぬ我袖の露けくのみもなりまさるか。

三七

いくよへて後か忘れん散ぬべき野への秋萩みかく月夜を

ふかやぶ

○萩における露の白玉に月のうつりて、きら／＼と光るを、磨みがくといひなされたるなり。さて其けしきの幾年を経て後か忘れん。忘るゝ世はあらじとなり。一首の表に露とはなけれども、露の事とは聞ゆるなり。されど又、風舂抄の如くなれば、露の事にあらず、たゞ月の明らかなるをいへるなり。此方も穏なるさまに思はる。

三八

秋の夜の月の影こそ木の間よりおつればきぬと見えたりけれ 菅万ぬ 六帖おち葉ごろもと身にうつりけれ
よみ人しらす

○抄には、木の間の月に、葉の影の身にうつるは、落葉衣となり。説一零羽二十衣。誤なりとあり。契沖法師は、下ノ句、おち葉衣と身にうつりけれとありては、心得がたし。此歌、菅家万葉に、「秋之夜之月之影許曾自木間墮者衣砥見江亘氣禮と有。此真名にかゝせ給へるにて心得べしといはれたり。然らば、木間の月影は、ことに目にたちて白く見えて、それを白妙の布などゝ見たる意なるべし。又思ふに、六帖には、此集の如く、落葉衣と云々とあれば、他に落葉衣と云詞の例は、いまだ見当らざれども、月影の木ノ間をもちて、斑イロジに身にうつるを、仙人などの、木ノ葉をあつめ綴りて着たるさまの如く、思ひよせたるにはあらしか。木の間よりといひ、身にうつりとあるなどよく思ふべし。曾丹集に、「吹ちらす冬の嵐ぞうらめしき木の葉を衣とたのむ山人、といふ歌もあればなり。又師のいはく、上件の説ども、一わたりさる事な二十一一されど、又思ふに、拾遺集第七の歌に、月の、きぬを着て侍けるに、「久方の月のきぬをばきたれども光はそはぬわが身なりけり、といふ歌の、月のきぬといふことを、月々の衣なりなどいふ説はいかゝなり。こは調ヌの絹ヌなるを、月の意にとりなせるなりと、わが鈴屋翁の説あれば、此歌も、菅家万葉に見えたる、四ノ句の、おつればきぬとあるを用ひて、調の絹の意ならん欵といはれたり。調ノ絹は、延喜式に見えたり。但し此説は、おちば衣のうたにはさしも要なけれど、落葉衣といふことのうたがはしきによりて、考へ合すべきことなれば、かくいふなり。

三九

袖にうつる月の光は秋ごとにこよひかはらぬかげと見えつゝ

○月の光は、毎秋八月の十五夜毎に、かはらぬ影と見えて、我身は衰へて二十一二かはり行、事よとなるへし。

三〇

秋の夜の月にかさなる雲暗て光さやかに見るよしもがな

○抄には、曇れる夜の歌と見ゆ。心明らかなりとあれど、契沖法師は、讒者などにさへられたる人のよめるかといはれたり。まことにさもあるべし。ことなるゆゑありげに聞ゆる歌なればなり。

小野美材

三一

あきの池の月のうへこぐ舟なればかつらの枝にさをやさすはらん異

○月の池水にうつりたる、其池に舟を浮へたるを、月の上こぐといへるなり。さて月中の桂の枝に棹やさはらんとなり。抄に、賈島が句に、棹ハ穿ッ波底ノ月、船ハ厭ス水中ノ天。土佐日記に、「水底の月の上よりこぐふねのさをにさはるは桂なるべし、といふを引たるはよくかなへり。二十二オ）

深義父

三二

秋の海にうつれる月を立たちかへり波はあらへど色もかははらす一本

○意明らかなり。

是異
惟貞の御子の家の歌合に

三三

あきの夜の月の光は消あかげれど人のこゝろのくまうちはばて六帖らさず

通昭 一本
よみ人しらす

○意はかくれたるくまもなけれど、猶ゆゑありげに聞ゆ。次の歌の下に、合せていふを見合すべし。

三四

秋の月つねにかくてるものならばやみに女ふる身はまじら六帖ざらまし

○抄に、やみにふる身とは、不幸に思ひはらす方なきをいふべし。万人時にあふ中に、たま／＼我不幸の身のまじるやうの事は、常に秋月明ならば、あるまじきものをとなり。下心は、君の御恵あまねくはこの三十三心なるべしとあり。げにさる事と聞ゆ。契沖法師も、此二首も心あるべしといはれたり。さるは、

上の「秋の夜の月にかさなる雲晴て云といふ歌を、讒者などにさへられたる人のよめる歎とあると、合せ

ての説と聞ゆ。思ふに、此二首六帖には深養父とあるも、ひたをるにはたのみがたけれど、是貞ノ親王の家の歌合は、さしも遠からぬ代なるを、よみ

をあらはされざりしにはあらじか。しひてよみ人をもとむるは、あぢきなきわざなる事は、さらなる事にしあれど、猶其歌の意によりては、又むげに心にもかけずておくべきにもあらず。さては一廿の意たしかならぬすぢもあればなり。「秋の海にうつれる月をといふ歌も、ことなる事なき歌なれど、此よみ人しらすの同じ人の歌なれば、同じ所にまづ出せるにもあるべし。「波はあらへど色もかはらずといふも、いさ／＼か下心あるにもあるべし。又思ふに、此二首の作者、通昭とある本もあるにやらず、此僧正は、仁明天皇かくれさせ給ひて、時うしなへるさまなれば、かしらおるされたるよし、家集、また大和物語などに見えたり、其をりなどよまれたるにやあらん。さるは、嘉祥仁寿などの頃ならんと思はるれば、大かた此歌合のころと、時代は合へるやうなり、されど、これらの説は、みな(二十三オ) 賦にいふのみなり。

八月十五夜

藤原雅正

三五

いつととも月見ぬ秋はなきものをわきてこよひのめづらしき哉

○貫之集「月ごとにあふ夜なれどもよをへつゝこよひにまさるかげなかりけり。

三六

月影はおなじ光の秋の夜をわきて見ゆるはこゝろなりけり

よみ人しらず

○いつも同じ月影の、とりわきてさやけく見ゆるは、八月十五夜ぞと思ふ、我が心よりの事なるよな、といふなり。後拾遺^上秋「いつも見る月ぞと思へど秋の夜はいかなる影をそふるなるらん。」

月を見て

紀淑望^光朝臣(二千三〇)

三七

空とはみ秋やよくらん久かたの月のかつらの色もかはらぬ^ザ一本

○秋の至る所は木の葉のすべて紅葉すれども、空の遠さに、秋の避^まて行かぬにやあらん、月の桂のみは、色もかはらぬ事よとなり。よくらんは、古今^草に、「春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふと見ん、とあるなるどのよきに同じく、其所を避^まぐることなり。色もかはらぬは、いつも同じ光なるをいふなり。」

三八

衣手はさむ^{さむ}からねどもつらゆき
雪^雪か^かと^とぞ^ぞ見^見る六帖又一本

○後拾遺^上秋「白たへの衣の袖を霜かとはらへばつきのひかりなりけり。」

三九

天河しがらみかけてとどめ^てなんあかずながるゝ月やよどむと

よみ人しらず(二十四オ)

○古今上雜「あまのがは雲のみをにてはやければひかりとよめず月ぞながるよ。

三〇

秋風になみやたつらん天川わたるせもまなく月の流るよ

○意は聞えたれど、猶下ノ句写誤などあるにや。渡る瀬にても、わたる間にても、少しいかよなるこよちす。よどむ瀬などあらまほしきやうなり。又思ふに、常にも、水に月日などの影のうつりて、きら／＼とかかやく中へは、おりたちがたぎ物なるより思ひよせて、いへるにもあらんか。

三一

秋くれは思ふ心ぞみだれつゝまづもみぢ葉に一本とちりまさりける

○秋が来れば、風に紅葉の散る事なるが、それより先々へ、我心が乱て、散二十四まざる事よとなり。散まざるは、日にそへて散行事なり。古今上秋「物ごとと秋ぞ悲しきもみぢつゝうつるひゆくをかぎりと思へば。二ノ句の思ふは、かるく添へたるにて、趣意は心ぞ乱つゝ云々といふのみなる事、古今下春「をしめどもとどまらなくに春霞かへる道にし立ぬと思へば、などの類なり。

深養父

三二

消かへり物思ふ秋の衣こそ涙の川のもみぢなりけれ

○紅の涙に染ソたる衣へ、猶涙のひたものに流るれば、袖は即、涙川に散浮びたる紅葉なるよとなり。さて、かくよまれたるよしは、恋の歌なるべし。紅の涙は、多くは恋の上にていふ事なればなり。消かへりは、心のきえ／＼となる事を、つよくいへるなり。ぬれかへり伊勢集「ぬれか(二十五才)へり玉露かづけどあかなくに類む見るめのためてなければ わきかへり

新拾遺歌一「谷かげや岩間をせばみ
行水のわきかへりても渡る、袖哉」
などいふ詞の類なり。

三三

ふく風にふかきたのみのむなしくは秋の心をあさしと思はん

よみ人しらす

○抄云、恋によせてなり。我深く頼むかひなくは、君が人をあく心の、あだなりと思はんとなり。秋の田に寄せてなりと。此意と見れば、秋の頃野分の吹て、田ノ実のむなしくなりなば云々といふを表にて、裏の意にては、秋の心をは、たゞ人の心をと云意にて、人の我を厭厭く意までをかけたるにはあらざるべし。但し初句の「吹風にといふには、風の便にといふ意もあらんか。又たゞたのみの空しくはといふ、仕立の方にのみいひたるならんか。田実を、頼頼にそへたる事は、古今五恋二十五」秋風にあふたのみこそかなしけれ我身むなしくなりぬと思へば、などの類なる事、いふもさらなり。又思ふに、もしいは秋の縣召などの事を下に思へるにはあらじか。二三ノ句、末句とつらしとなどはいはずして、改しの詞などは、恋の方よりは、縣召などの事を思へる意の方に近きやうなり。

三四

秋の夜は人をしづめてつれぐとかきなす琴の音にぞなきぬる

これさだのみこの家の、歌合のうた

○此歌、一わたりはよく聞えたるやうなれども、猶、人をしづめてと云こと、ゆゑあるべき詞なれば、くさくさに思ひめぐらせども、いまだえ思ひ得ず。かきなすことのは、其をりの事を云て、音にぞ云々といはん料とせるなるべし。心に思ひあるをりは、琴にもあれ笛などに二十六もあれ、其物其事につきて、其

思ひの加はる事は常なり。万葉七「こととればなげき先だっけだしくも琴の下樋につまやこもれる、古今下維「わび人の住べき宿と見るなべになげきくはるる琴の音ぞする、などもあり。かきなすは、カキナ攝令セツメ鳴なり。古今二「秋風にかきなす琴の声にさへはかなく人の恋しかるらん、などもあり。

露をよめる

藤原清正

三五

ぬきとむる秋しなれば白露のちくさにおける玉もかひなし

○露は、玉とは見ゆれども、貫きとめたる秋なれば、千葉におきたるも其かひなしとなり。

八月十五夜

三六

秋風にいとふけゆく月影をたちなかくしそあまの川ぎり二二十六ウ

○ふけたるもをしき月に、いとと霧をいとふ心なりと、抄にいへるが如くならんか。然れども、初句「秋風にといふこと、少し穏ならぬさまなり。師云、然り。猶しひていはど、初句をば、三ノ句の「かくしその所へつけて、秋風に霧を払はせて、立かくさすなと云意ならんかといはれたり。麴麻呂は、月ノ下に薄く霧の立たるに、風に霧がなびけば、月も西へいそぐやうに見ゆるを、月を惜しと思ふ情より、月の風にさそはるゝやうに思はるゝを、秋風に更ゆくといへるにもあらんかといへり。此説や然るべからん。

延喜御時、秋、歌めし有ければ、奉ける

貫之

三三

女郎花にへる秋のむさし野はつねよりも猶むつまじきかな(二十七)

○武蔵野は、紫のゆかりにて、たゞにもむつまじきを、女といふ名の花の咲にほひてある秋は、例よりもむつまじく思はるゝ事かなとなり。古今^上雜「紫の一もとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る。此歌よりおこりて、紫の一もとゆゑとよみ、又むらさきのゆかりともよむよし、契沖法師も縣居ノ大人などもいはれたり。

三三

秋霧のはるゝはうれし女郎花立よる人やあらんと思へば

人につかはしける 兼覽王
○霧のまぎれに、若シ立よる人のあらんかと、疑はしく心もとなければ、霧のはるゝはうれしとなるべし。二句にて切て、三ノ句以下をつゞけて見るべし。かくて裏の意は、相知給へる、宮仕の女房などの、人しげき所に居たるを、里住などして居るころか、又は、此王のあたり近く(二十七)、おぼつかながらぬ所にうつろひ居るなどに、いひやり給へるなるべし。

三三

をみなべし草むらごにむれたつはたれまつむしの声にまよふぞ

題しらず よみ人不知
○松むしの鳴は、誰か他に待べき人ありてなくならんを、女郎花どもの、我が事にやと思ひ迷ひて、こゝかしこの草村ごとに、むれたちて居ると見ゆるが、かれは誰を待つむしの声にまよふ事なるぞといふなり。

三四

女郎花ひる見てましを秋の夜の月の光は雲がくれつゝ

○女郎花をば、昼見るべかりしものを、今かく夜に入たれば、月の光は、雲に隠れくして、思ふ程にも見られず、おぼつかなき事よとなり(二十八世)。

三五

をみなべし花のさかりに秋風のふく夕暮を誰にかたらむ

○さかりなる花の、しほれぬべくふぎすさぶ秋の夕風の、物悲しきけしきを、ながめ出したる宿のさまなるべし。末ノ句は、誰にかかり合せ、いかにかせんと、花のうへを深く思ひ入れたる意と聞ゆ。

貫之

三六

白たへの衣かたしき女郎花さける野べにぞこよひねにける

○万葉八、「春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける、などの類にて、女郎花のふりすてがたさに、一夜旅ねをしたる事よとなり。続後拾遺上秋「女郎花よるなつかしくにほふかな草の枕もかはすばかりに。」

三七

名にしおへばしひてたのまん女郎花はなの心の秋はうくとも(二十八世)

○女と名につきてあれば、異本一本の方にては、女と名につまは、あながちにもたのまん。秋さく花なれば、花の心の厭くといふ事はうくありともとなり。後々厭かるゝ事のあらんは、愛くありとも、それまでの事をば思ひもはからず、まづうちつけに頼まんと、いとあだめきすぎくしきさまにいへるなり。秋を、人の厭く

意にいへる事は論なし。

みつね

三四

たなばたに似たる物花異かな女郎花秋より外にあふときもなし

○古今上秋「秋ならであふことかたきをみなべしあまのかはらにおひぬものゆゑ。

よみ人しらず(二十九)

三五

秋の野によるもやねなん女郎花はなの名をのみ思ひかけつゝ

○秋の野のおもしろきを、昼見たるのみにては、いかにも不足アざれば、かくなから夜も寝やすべき、花の名の女といふを、ひたすらに思ひかけつゝとなり。拾遺秋「日ぐらしに見れどもあかぬをみなべし野べにやこよひ旅ねしなまし。下ノ句に、のみといひつゝといへるは、深く思ひかくる意なり。

三六

をみなべしいろにもあるかな松むしをもとに 異又繁性集ともしやどして誰をよぶ 繁性集まつらん

○抄に色にもある哉は、色好となり。我もとに松虫を宿して、又まつといふ名につきて、誰をまつぞとなりとあるが如く、好色にあだくしくもある事かな。待マツといふ名の虫を我と一所に宿らしめ、それに声をたてさせて、誰を待らんといふ意なり。菅家万葉「長きよを誰まち(二十九)かねて女郎花人まつむしの秋ごとになく。二ノ句、いろに云といひて、好色なるあだくしき意なるは拾遺雜恋。又、「染川を渡らん人のいかでかはいろになるてふ事のなからん。又、紅葉賀巻、三条の宮にて、兵部卿ノ宮の、源氏ノ君に對面し給へる事をいよ所に、此御さまの、

常よりことになつかしう打とけ給へるを、いとめでたしと見奉給ひて、むこよなどはおぼしよらで、女に見ばやと、いろめきたる御心にはおもほす、とあるなど、猶後世の歌にも見えたり。

前栽に、をみなべし侍ける所にて

三
女郎花にはふさかりを見る時ぞわがおいらくはくやしかりける

○おいらくは、老になりたる事なり。女郎花の咲にほふ盛を見るに、我も若からば、女といふ花に戯れんものをと、年の老たる事の、くやし（三十）き事よとなり。女郎花はさかりなるに、我は老ゆくが悔しといふにて、二ノ句と四ノ句とかけ合て、深きあはれをこめたる歌なり。本朝文粹（源）、源順朝臣の詠（二）女郎花（三）詩に、花（ノ）色（ハ）如（三）蒸（セル）粟（一）。俗呼（チ）為（二）女郎（一）。聞（レ）名（ヲ）戲（レ）欲（レ）契（二）。僧老（一）。恐（ラ）クハ（マ）ンコト（ヲ）。衰老（ノ）首（ノ）似（タ）ル（ニ）。霜（一）。此歌躬恒集には、詞書、をみなべしの多かる所にて、とありて、歌の二ノ句「おほかる野べをとあれども、此集の方まさるべし。

すまひのかへりあるじのくれつかた、女郎花を折て、あつよしのみこのかざしにさすとて

三条右大臣

○すまひは、相撲（ヌ）なり。かへりあるじは、還（カ）襲（ヘ）なり。相撲の節会は、七月に行はるゝ事なり。委（ト）くは、類聚国史第七十三（臨時部）、西宮記（七月）、また江次第（八）などに見えたり。今は、要をつみいでゝいはんとす。公事根源に、是は諸国の供御人（ノ）を召集て、七月に、相撲ノ節といひて、天子の御覧する事なり。先づ十六七日の間に召仰（ノ）あり。上卿勅を奉て、左右の次将に、相撲あるべきよしをめ

三六

をみなべし花の名ならぬものならば何かは君がかざしにもせん

としごろ家のむすめにせうそこかよはし侍けるを、女のためかるくしなごいひて、ゆるさぬあひだになん侍ける。

し仰らる。左右の近衛、方^{カタ}をわけて、国々へ使をくだして相撲をめす。是を万葉にも、ことり使と申なり。廿六日に大ノ月ハ廿六日、小ノ月ハ廿五日内取といふ事有。内取ハ、ナラシノ心バヘナル故ニ、左ハ左ドチ、右ハ右ドチ取ルヨシナリ出御なる。左右の相撲人、犢鼻の上に、からきぬ江次第に、狨衣はかまを着て、一々に相撲を取て勝負あり。廿八日江次第云、大ノ月ハ廿八日、小ノ月ハ廿七日に召合あり。召合抜出ハ、左右相撲相合也ト、江次第ニ有天皇南殿に出御なる。王卿参上す。大将、相撲三十一の奏をとり、十七番とりて勝の方乱声あり。また、廿九日に、抜出とて、相撲をすぐりて御覽せらるゝなり。神龜三年に、はじめて諸国よりめしのほせらるゝと見えたり。これにて一わたり心得べし。かへりあるじとは、数多く勝たる方の左多く勝てば、左大将、右多くかては右大将の里亭にてあるなり、左右の大将、管領にて事を行はるればなり大将の里亭にて、相撲人に酒を給ひ、親王公卿殿上人を招して、酒宴あるをいふなり。これは其方の、中将少将より初て、相撲人を饗せらるゝに、親王公卿などは、垣下ツカの座につき給ふよしなり。垣下は、相伴シヤパンの意なり。三条ノ右大臣定方ノ公、左近衛ノ大将を兼給へる事、公卿補任に見えたらば、其時の事にて、敦慶ノ親王も、垣下の座に着給へるなるべし。正明云、還饗カヘリアツクは、勝方の祝ひの三十一心ばへなり。かへるとは、朝廷より里邸へ帰る意、あるじとは、饗心カヘリアツクの事なり。源氏物語常夏ノ巻に、競馬の還饗の事見ゆ。かれは、夕霧ノ君中将なれば、まれなる例なり。多くは大将の事なり。かざしの事は、此時は見えぬ儀なり。めづらしき例なるべし。かざしの為やうは、冠カザシの巾子カザシのもとに上緒アソブといふ紐あり。今は様にて、付たりそれをはなちて、其間へさす事なりといはれたり。

○此花、女といふ名ならずは、いかでか君が頭挿かぶにもすべき。名にあひ三十二たる花ゆゑに、君がかざしに奉るなりと云て、年ごろむすめをかたらひ給へる事をは、ほの知ながら、ゆるし奉らざりしかども、今日のついでにゆるし奉るぞ、といふ意なるべし。此歌、抄にも此意とせり。然れども又、瓶麻呂が異なる考もありて、其方もすてがたきこちすれど、いかであらん。いまだよくも思ひさだめされば、猶よく考て、追考に記すべし。

法皇、伊勢が家の女郎花をめしければ、奉るを聞て

○法皇は、宇多ノ帝にて、即寛平ノ法皇なり。此詞書、いさゝかいふべき事あれども、下に歌の事を論へば、其所に合せていへり。

批把左大臣

三見

女郎花をりけん枝のふしごと秋伊勢集に過にし君を思ひ出やせし三十二

○此歌、四ノ句家集に秋をとある方まさるべし。されどこは論あることなれば、委くは下にいふべし。一首の意は、近き頃、院の御門のめし給ふによりて、女郎花を奉られたりと聞くが、女郎花は即チ女にて、そなたになぞらふべき花なれば、さきに御門につかへ奉て、御伽にもめされたるをりの事を、思ひ出されたるかと云て、今にをりふしごとには、もとの事を思ひ出るにてあらん、といふをふくめ給へりと聞ゆ。二三ノ句、「をりけん枝のふしごと」とある詞は、をりふしごとと云意にいひかけ給へるなればなり。此伊勢ノ御は、はじめ仲平公批把左大臣と物いはれたるを、心にもあらで絶たる後に、帝にならされ奉て、御子をうみ奉られたれば、其心をふくめて、かくはいひやり給へるなり。猶委くは、次の歌にいふを引合せて

見るべし (三十三ま)。

かへし

伊勢

三三〇

をみなべしをりもをらずもいにしへをさらにとよべき事ならぬかな 六帖
かくべき物ならぬに

※をりもをらずもは、俗言にいはゞ、折ラウガガラルマイガといふに近し。こと、家集。万葉八に、「梅花をりも不折毛(ワラ)見つれどもこよひの花になほしかずけり」とあるに、詞は同じけれど、温へるさまいさか異なる。

○をみなべしといふ花は、折たるにも折らざるにも、昔の事などを、かけていふべき事には待らず、と云て、今さらに、其やうなる事はのたまふな、といふをふくめたるなり。上の、「女郎花をりけん枝の云を、抄に、これは宇多法皇御在世に奉りしを聞て、崩御の後に、仲平公此歌を遺し給ふなりとあるは、四ノ句、「過にし君をと有て、家集の左注に「とはていししの御門うせ給ひて後の事なるべし。」ともあるによられたるなるべく、まことに、世に大ましますほどならんに、過にし君とは申まじき事は、論を待たぬ事なり。然れども、実に崩御の後ならんに、過にし君を思ひ出やせしなどやうの贈答あらんは、うせぬる人をしの(三十三ま)うせぬる人はよの雨なれば させるをかしき事もなく、此作者たちの贈答には、崩御の事にはさしもかゝはらず、かくさまにはいひかはさるべきことゝおぼしきなり。又詞書に、奉るを聞てとあるも、花を奉られたるより、ほど遠きころの事とは聞えず。崩御の後ならんには、奉りしとあるべき事なり。但し、崩御の事にはかゝはらず、奉るをあるは、少しいかゞなり。異本家集には「院の帝、物へおはしましけるに、女郎花おほかりと御らんして細に給へりけるを、翻けり」と聞て、批把のおとゞ「女郎花ほりけん枝のふしごと」に過にし君は思ひ出やせし」とあり、かくてはよくかなへるさまなり。 此歌、家集には、御門ものにおはしましけるに、女郎花多かりと御らんじて、ほりに給へりける、奉るを聞て、びはのおとゞの給へる、「女郎花をりけん枝のふしごと」にすぎにし秋を思ひ出やせし。」とはていじのみかど、うせ給てのちのことなるべし。」御かへし、「をみなべしをりもをらずもいにしへをさらにかく(三十四ま)べきことならぬに、とあ

り。過にし秋をは、過にし時をといはんが如く、かの宮づかへして、ならされ奉たる頃の事をさしてのたまへるなれば、末句のせしとあるによくかなへり。せしは、過去たる時の事をいふ詞なれば、かの花を森るをりに、モ此歌、二れよりさきにもありし事を思ひ出たる意なる事は、云もさらなり。三ノ句に、今もをりふしごとには、思ひ出し奉るやと云意ふくみてあるを、歌の表の意と、其ふくみたる意とを、一つに合せてとかんとするゆゑに、まぎらはしくなりて、一首の意明らかならずなるさまなり。すべていづれの歌にもあれ、ふくめたる意はふくめたる意として、混雑マヤざるやうに、一首の表をは表にてとくべき事なり。かくて此歌此集を初め、六帖にも、「女郎花をりける枝のふしごと」に異本家集にも、君と有て、秋とあるは、たゞ流布の家集のみなれば、君とあるは誤ならんとは三十四いひがたけれど、君とあるを用ふとも、意はなほ、秋とあるにいくばくも違はず。宮づかへのをりをさせりと見ん方然るべく思はるれば、上歌をば其意にてとけり。

此作者たちの大かたは、伊勢家集云、いづれの御時にかありけん、大みやす所玉イマダ后ニナラセと聞ゆる御つぼねに、大和におやある人即伊勢ノ御ノ自身ノ事也さぶらひけり。親いとかなしうして、男などもあはせざりけるを、御息所のせうと、此把左大臣仲平公也年ごろいひわたり給ふを、しばしはさらにきかさりけるに、いかゞありけん、おやいかゞいはんとなげきけるを、年ごろへにければ聞つけてけり。されど、すぐせこそありけめとて、こ

とにいはざりけり。たゞわかき人はたのみがたきものぞといひけるほどに、時のおほいまうち君のむこにとら三十五これにけり。其をりにぞ、おやもさればよといひければ、女はづかしと思ふほどに、此男の許より人來り云々。コレヨリ、大和へ行く事、「三輪の山いかに侍見ん云々ノ歌、初瀬ニ詣タルコトナドアリテ、かゝる程につかうまつりし所御息所ヲ申ナリより、はやのぼらせよ

とおほせ給ひければ、はやくのぼり給へ、もとより宮づかへをこそし給へと思ひしかと、思はせていふに、はやのぼり給へト云ヨリハ、父ノ許ナル人々ナドノ詞ト聞ユ。思はせてト云コト、聞トリ難シ。写誤ナドアルニ、異本ニモ同クヤウニアル也。サテ此家集ヲ引タルハ、異本ト互ニ見合セテ、正シカルベク見ユル方ヲ引ケリ。前後ノ卷々ニ引タルモ、三十八人家集ト三物ナルハ皆然リ。し

後撰和歌集卷第六新抄（三十六才）

ぬるこちすべし。よしなき君たちやは思ひかけしなどいひて、あけて仰事ノアリン日ニうち字落タルカ○まぬりつかまつるあひだに、此男も見かはして、仲平公あはれにいへど、逢はで見かはすほどに、此男の兄なる男ありけり。時平公今はあの人仲平公はよにもとはじ。也なにかたのみたまふ（三十五）。我をおもへせなどせちにほ誤カ異本ニ思ヘトアリいへど、文ばかりは見つゝも、さらにあはでありけり云。此間ニ、時平公ノ贈書、此女は、これかれいへどきかず。宮つかへをのみしてありけるに、時の御門、平字ノ帝めしつかひ給ひけるやうぞけしからぬ。人のことをきかざりけると、心にもおやなとも思ひわたりけるうちに、はらみにけり。さて男皇子をうみ奉ける。我やおみづからもいとうれしと思ひけり。つかうまつりし御息所も、七家ノ后トなり給ひにけり。云とありて、やゝ末に此贈答も出たり。此家集に見えたるおもぶきをも、よく味ひ見てさとるべきなり。